

# 伝統の「池田炭」守る

畳の一部を切って床下の名が付いた。

に備え付けた小さないろこの茶室の主で茶道三りに、炭が赤々と燃えて千家の一つ、武者小路千家の常任理事、佐伯江南の民家にある茶室。直径約七センチの円形の炭は、茶道の開祖・千利休が愛したとされる木炭、池田炭だ。

## 親子の職人熱意燃やす

炭の断面がキクの花のように見えることから「菊炭」とも呼ばれ、燃焼時間が長く、茶の湯の世界で珍重されている。

現在の大阪府池田市が集積地だったため「池田炭」

能勢町役場を退職し、炭焼き職人に転じた。窯作られたが、この炭は地元のりから池田炭の生産に本格的に取り組んだ、父安義さん(モロ)の跡を継ぐためだった。

年四月までの主に冬季に作業が集中する。クヌギを山から切り出し、狭い炭焼き窯の中に、適当な長さで切った木を次々と並べる。窯に火を入れてから炭が焼き上がるまでには一週間かかる。最盛期にはその作業が毎週続

義隆さんは「後継者に炭焼きは十二月から翌

くという。大阪府によると、一九七〇年代の生産量は五十ト前後だったが、ここ数年は十分の一の約五トで推移。正式な茶会で使用する高級な池田炭は、京都府内などの特定の間屋に十二キ(一俵)当たり九千円前後で納品され、茶道家ら昔からの顧客に引き取られる。

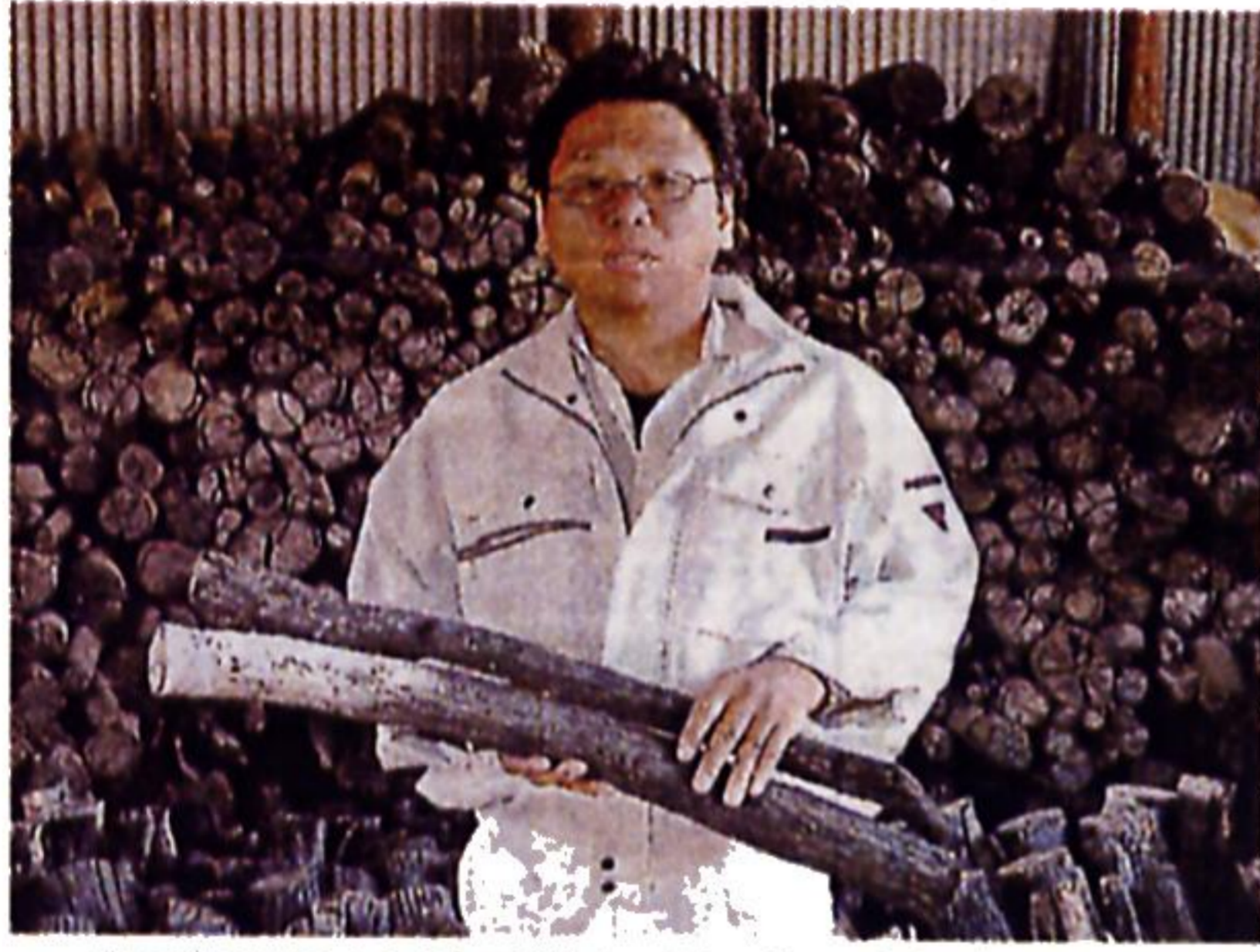
斎さん(六三)は「茶席では炭が時計代わり。燃え尽きる時間が速くても遅くてもだめだ。ゆったりとお茶を楽しむには菊炭がふさわしい」と魅力を語る。

原料木となるクヌギの減少や後継者不足で将来への不安がある中、池田市周辺の大阪府能勢町などの数少ない炭焼き職人が生産を支えている。そのうちの一人、小谷義隆さん(四四)は今年三月、約二十四年間務めた

「しっかりとした炭を作れば受け入れてもらえる」と、伝統の火を絶やさぬ義隆さんらの奮闘は続く。



親子で焼いた池田炭を手にする小谷義隆さん(大阪府能勢町)



親子で焼いた池田炭を手にする小谷義隆さん(大阪府能勢町)



池田炭 大阪、兵庫両府県境の北摂山系のクヌギを材料とする木炭。火持ちがよく、燃えた後も形が崩れずに真っ白な灰が残るのが特長。池田銀行系シンクタンクによると、室町末期から生産が盛んになったという。クヌギ林の育成などに取り組み、特定非営利活動法人(NPO法人)の「池田炭振興協会」が今年4月に発足。ホームページ上から、インテリア向け池田炭などを注文することができるとが